

 シリーズ「きょうだいの思い」⑧

～中学校の『一年間』～

中学時代といえば、忘れられない出来事がある。
弟が一年生の時に、約30時間ほど行方不明になった。

弟は数百円を持って、自転車でお菓子を買いに出かけるのが、当時の『放課後の日課』のようになっていた。お菓子を買うだけではなく、本屋に行ったり、好きな電化製品を見に行ったり、好みのスーパーへ遠征することもあった。

弟にとって高槻や茨木は庭のようなもので、枚方や樟葉、桂や千里丘へと自転車でどこへも行っていたようだ。「どこへ行ってきた？」との問いに「ウメダ！」と答えたこともあった。でも弟は必ず帰って来ていた。言うまでもなく、自閉症の弟は方向感覚が抜群なのである。

寒い寒い真冬のある日、弟がなかなか帰って来なかった。それまでも、帰宅が夜の9時や10時になることが何度かあった。当時、父は単身赴任中で、母は一人で捜し回り、私は自宅で電話対応の留守番となった。

警察に捜索依頼を出した。急ぎよ、父も帰宅して、両親は捜し回り、私は学校を休んで自宅の電話番号をしていた。親戚の伯母も駆けつけてくれて、私と留守番してくれた。あの時、今のように携帯電話があればどんなに便利で役立つだろう。捜し回る両親と連絡が取れず、自宅に戻って来るまでの間、15才の私でも心細かったのを覚えている。

後で知ったことだが、学校では校内放送で弟が行方不明になったことが伝えられ、先生達も捜索のため、その日の放課後のクラブ活動は中止になったようだ。

公開捜査に踏み切る直前に、弟が東大阪で見つかった。ずっと飲まず食わずで、ただひたすら自転車を走らせていたのではないと思う。どこかで弟のアンテナに狂いが出て、高槻への方向を見失ったのだろう。約30時間、どうしていたのかは弟にしかわからない。この出来事で、周りのたくさんの人が心配してくれたこと、弟の同級生達が捜し回ってくれたこと、普段は話もしない私の同級生男子が声をかけてくれたこと...たくさんの方の温かみがあった。弟が見つかったとの一報が入った時は、私が自宅で留守番中だったので、隣に住む人に「おばちゃん！弟が見つかったって連絡があった！」とすぐに伝えに行った。

まるで小さな子供のように大声をあげて泣くおばちゃんの姿に、心の中で《おばちゃんが隣の人で良かった》とジワツときた。

自閉症の障害児がいる世帯が近所に住むことを、周りの全ての人々が好意的に受け入れてくれるものではないのを、私は子供ながらに何となく肌でわかっていた。だから隣に住む人のいつわりのない涙が私の心にしみこんできた。

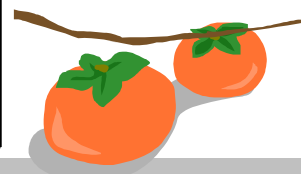
そして、この出来事でもう一つわかったことがある。いざという時は、男親より女親の方が強いということだ(笑)

自閉症の息子を持って、世間に揉まれ鍛えられ、頭を下げる経験が多いのは、やはり圧倒的に母親の方が多い。その数々の経験が母親を強くなやかにするのも知れない。

15才の私は、父の脆さを垣間見た。『母は強し！』である(笑)

まえほ通信
まへほつうしん

発行日	2011年10月1日
発行元	自立センター前穂 〒569-1022 高槻市日吉台 1番町21-18 072-689-8600



 前穂からのお知らせ

【常勤職員の退職挨拶】

スタッフ退職挨拶

